

千字文試論

—その成立をめぐる—

中 田 正 心

1

現在通行する千字文は、「勅員外散騎侍郎周興嗣次韻」と題す。『梁書』には、周興嗣が千字文を撰したことを、次のように述べる。

自是銅表銘，柵塘碣，北伐檄，次韻王羲之書千字，並使興嗣為文，每奏，高祖輒稱善，加賜金帛。（列伝第43文学上）

同様の記事が、『南史⁽¹⁾』の周興嗣伝にみえる。

ところが、これらの史書は蕭子範を同じく千字文の作者としている。『梁書』によれば、

王愛文学士，子範偏被恩遇，嘗曰「此宗室奇才也。使製千字文，其辞甚美，王命記室蔡遠注积之。自是府中文筆，皆使草之」。（列伝第29蕭子恪伝）

と言う。『南史⁽²⁾』においても、同一である。

齊武帝の弟章文献王の子が、蕭子恪兄弟である。梁にいたって、革命ごとに行なわれていた殺戮にあう身ながら、梁武の配慮によってこれを免れ、かえって、子恪兄弟16人⁽³⁾がみな梁朝に仕えた。このうち、特に文学をもって名をなす、子恪、子範(子質)、子雲、子暉等が重用された。梁武はある時、文德殿に子恪を引見し、「自分が都を陥れたとき、革命によって人心を新たにすべきで、宗室を処分せよと周囲は言った。しかし、自分はこれに従わなかった。卿は我を疑うことなく、しばし我のなすところを見よ⁽⁴⁾」と論している。南朝からの慣行であった、宗室誅殺の運命から救われた蕭子恪兄弟が、いかに梁武に感謝し恩を思うたこと

千字文試論

か、言うを待つまでもない。それなればこそ、兄弟たちは、己の天分の履行に懸命であったし、梁武もその精勤ぶりを温かく見守っていた。

蕭子範は子恪の第6弟で、『全梁詩』に詩9首を見る高名な文学者であった。天監の初めにあっては、太子洗馬を任じて、梁武帝の弟、偉に仕え太子を世話し、後には太子中舎人となっている。このように、太子の教育、事務にあたっている身であれば、梁武が皇子達の教科書編纂にあたり、適任の第一人者とするのも、当然であったわけである。子範は日頃仕えている太子、皇子達に愛情の念と慈訓をもって、千字によって文を成したのであった。それを史書は「使製千字文」と記す。従来の急就章と異なる新しい学書であった。これに蔡邕が注釈をすることによって、府中に広く迎えられたのである。

一方、周興嗣は「次韻」して千字文を撰したという。ここでいうところの次韻は、唐代白居易等が盛んに行ったものとは、異なるという見方もあるが⁽⁵⁾、沈約が『四声譜』を著わしていることを念頭におくと、今日の次韻という意味にとることも可能かとも思うが、疊韻して韻文に整理した、ということになろう。いずれにせよ、子範の製った千字文を、加筆編纂したのが周興嗣であったと判断するのである。もちろん、子範ほどの人の作に手を加える周興嗣も、また当代きっての文学者であった。これより前に、光宅寺の寺碑をつくるにあたって、陸倕と周興嗣に競作させている⁽⁶⁾。陸倕はかつて、八友の1人で、帝の古くからの友であるにもかかわらず、結果は周興嗣の文を用いたという。帝が人情を介入させる暇のないほどに、周興嗣の文が秀れていたことを物語っている。文学者興嗣は、これを契機にして、千字文の作業をも命ぜられることになったのである。また、書中に「次韻王羲之書千字，並使興嗣為文」とあるのは、子範が作ったいわゆる原千字文にそって、王羲之文字の中から該当する千字を拾い出し、興嗣が韻文に整えたことを意味する。

この千字文成立の事について、時代が下り、唐代の書が語るところによると、少しく具体性を持つ。殷鉄石なるものが帝の命により、王羲之の文字の中から、重複することなく千字を選び、一字ごとに紙に模書した。これによって次韻した

千字文試論

周興嗣は、一夜にして髪が真白になってしまったとするのは、唐・李綽『尚書故実』である。

梁周興嗣編次千字文。而有王右軍者。人皆下曉。其始乃梁武教諸王書。令殷鉄石於大王書中。榻一千字不重者。每字片紙。雜碎無序。武帝召興嗣曰。卿有才思。為我韻之。興嗣一夕編綴進上。鬢髮皆白。而賞錫甚厚。

また、同じく唐代の、武平一『徐氏法書記⁽⁷⁾』では、先に周興嗣が撰文し、それに殷鉄石が王羲之書中より模次したという。

こうしてみると、唐になると千字文といえは、周興嗣ということになっていたことが知れる。これに対して、子範の名は二書の正史が記すだけで、他に伝わることがなかった。それは、世人が手にする千字文が周興嗣の綴った音調に基づく詩であり、王羲之の書を目の当たりにすることができたことに起因しよう。これを厳密に、正しく言うならば、皇子達が使用した原本はそうであった。しかし、これが流传するには限界があるし、後世のように書を刻することがなされていない時代である。摹書という方法における伝本の範囲は、ほとんど皆無であったといつてよからう。それよりも、当世の能書家を書したものが、広く伝わったとみるのが妥当であろうと思う。

梁武はなにゆえに千字文を欲し、なにゆえにこれほどの人員を動員して、この作業に熱意を傾注したかという、疑問を抱かずにはおれない。察するところ、新時代による、新傾向の教科書でなければならなかったのであろう。撰文に二文学者を命じ、書聖王羲之の書を用いたことからみても、今日と次の世に及ばさんとする、帝のなみなみならぬ情熱を、感得するのである。帝には現在に必要なものは何んであり、そのことは将来いかように展開するかを、洞察するところの目を備えていた人であった。

帝の青春期は、南斉の蕭子良のもとに文人貴族が集う八友の1人であった。すなわち、沈約、謝朓、王融、蕭琛、范雲、任昉、陸倕に蕭衍（武帝）であり、学問、学芸に挺身する朋党である。蕭衍はその間にあって、南斉の政治を具さに洞察したことは、言うまでもない。後に、南斉を倒して梁の建国にあたっては、南

千字文試論

齊政治を対象物とされて、修正しながら、梁政治が行なわれていった。その現われは、八友時代からの沈約、范雲を重用して、国政が開創されたのである。このあたりに、現実的实践と理論大系が合致した文人天子の姿がある⁽⁸⁾。

帝は文学を愛し、文章を善くすることにおいても、人後に落ちるものでなかったことは、『梁書』本紀に言う。

天情睿敏，下筆成章，千賦百詩，直䟽便就，皆文質彬，超邁今古。

文学に理解のある帝でも、その新しい傾向の文学思潮に対しては、決して同意するものではなかった。沈約が全く新しいものとして、自信を持って著作した『四声譜』を奉ったところ、帝はこれを探らなかったという⁽⁹⁾。帝にすれば、士大夫とは儒教に基づく教養でありたかったわけで、この時代に表われてきた技巧に凝る文学は、意とするところではなかった。従来にない文人的政治・文化を展開させながらも、儒学を骨子として文質彬彬なる、伝統を踏まえることは堅持したのである。

かくなる哲学を持す帝は、将来までの期待をかけて、初学書千字文の編纂に留意した点は2つあった。その1つは、幼児が暗誦し易いためには、音調でなければならぬことと、教訓的内容が、盛り込まれていることである。これが、識学の面からみた機能能力であった。その2は、習字の側からで、王羲之の書字を写字に使用するならば、その機能は充分に過ぎるものである。帝はもともと羲之よりも鍾繇を善しとし、『観鍾繇書法十二意』を著わしている。この『十二意』のなかで、王父子より、鍾繇が優れていることを、温順な言葉遣いながら論定している⁽¹⁰⁾。にもかかわらず、千字文に羲之の書字を用いたことに、注目しなければならない。王羲之がそれまでの書芸を、近代的に革故したことは、帝も認める場所であったし、将来は羲之書の傾向を辿らなければならないことをも、認知するものであった。それ故に、将来性を託する初学書には、嗜好というよりは、己の書芸理論を抑制してまで、羲之書を用いたものと解釈できる。王羲之は今日に至るまで、中国書道史の本流であり、正統である。このことはひとり、中国のみならず、漢字文化圏をも含む書道を規定した、と解することが適格であろう。

千字文試論

王羲之をして書聖をもって呼称する所以は、そこにあるわけで、武帝の判断は、単に正しいというものではなく、普遍的であったといえる。かくして、千字文は梁代より今日まで、製作当初の目的を充分に果たして歩んできた。

千字文作成に携わった人びとの交通関係をみると、1つの集団をみることができる。周興嗣が晩年、両手が不自由になり、左目を冒されて歴史書編纂の任から身を引いてしまった。任昉は興嗣の身の上を案じ、才能を惜しむ言葉を常に言っていたという。

任昉又愛其才，常言曰「周興嗣若無疾，旬日当至御史中丞。」（『梁書』周興嗣伝）

任昉といえば、かつて八友の1人であって、梁代を代表する文章家であり、後進を推薦することに専心したことから、彼の邸宅には貴族が多数集まった。文学に遊んだことから、「竜門の遊」「蘭台の聚」と称されたという。周興嗣も任昉宅に集う有力な一員として、愛された1人であったであろう。周興嗣と深い交わりを持っていた文学者に、呉均がいる。均は、『後漢書』90巻、『齊春秋』30巻と歴史書を著わしただけでなく、「呉均体」という文体をもって世に知られ沈約の称讃をうけた詩人である。均も、任昉と交わって、周興嗣とともに「竜門の遊」の一員であったろう。こうしてみると、千字文は任昉・沈約を軸にした文学者集団⁽¹¹⁾によって、撰せられたとみてよからう。ここにもう1人殷鈞⁽¹²⁾なる人物を加え、唐書の殷銑石に代えて、製作者の1人としたい。

2

宋代淳化3年「淳化閣帖」10巻が刻された。この帖は当時宮府の蔵書を摹勒上石したもので、宋代最初の刻帖である。この淳化閣帖に後漢の章帝書というのが、章草で9行48字で綴った1帖を収める。その文は、

辰宿列張盈昴，海鹹河淡鱗羽翔，龍師火帝，鳥官人皇，始制文字乃服衣，遐邇壹體，罔談彼短，無恃已長，尺璧非尚，寸陰是競，孝當竭力，中興溫若思，慎終宜令，學優登仕，撰職從政，都邑二京，背芒面洛，浮渭，既集墳典，亦，

千字文 試 論

というもので、語句の使い方は現在通行する周興嗣千字文と、全く同一で、1節をすら感ずるものである。これは、鍾繇よりさらに時代を溯ることになり、あたかも章帝が創始者であるかの如き印象を与える。しかし、秦觀少游の言うには⁽¹³⁾、後漢代の文章として解することは不可能であることと、章書で書かれているからといって後漢代ということにならないのである。明・清朝になると、後世の偽書として、不信するものが少なくなかった。

明朝万暦39年、「鬱岡齋帖」10巻が刻印されて世に出た。この帖中に、「魏太尉鍾繇千字文右軍將軍王羲之奉勅書」と題する、千字文1帖を収めている。この題からみると、鍾繇の書いた千字文があり、この原本を王羲之が臨書したということになる。冒頭は「二儀日月，雲露巖霜，夫貞婦潔，君聖臣良」という文ではじまり、現行の「天地玄黄，宇宙洪荒，日月盈昃，辰宿烈張」とは、全く異なっている。ただ終句はともに、「謂語助者，焉哉乎也」で結ばれている。それにもかかわらず、天地玄黄・千字文は、周興嗣次韻とあるゆえに、梁代以前に存した千字文に、周興嗣が次韻した旨の説が出現してくることとなった⁽¹⁴⁾。このことは、わが『記紀』に記述するところの応神朝に、『論語』とともに伝来されたか否かにかかわる問題だけに、鍾繇千字文なるものの真偽を明らかにしておかなければならない。

そこで、周興嗣千字文と鍾繇千字文と称するものとの、語句をいちいち照合してみた。

イ) 4言1句共通するもの

甲帳対楹，鼓瑟吹笙，宣威沙漠，勤賞黜陟，駭躍超驤，謂語助者，焉哉乎也

以上7句28字

ロ) 2字共通する語句

玄黄	宇宙	日月	調陽	崐崗	海鹹	鱗潜	衣裳	周爰
平章	率賓	白駒	鞠養	靡恃	詩讚	羔羊	景行	形端
表正	福縁	寸陰	竭力	温清	之盛	容止	言辞	藉甚
学優	甘棠	尊卑	諸姑	伯叔	役分	歲規	造次	廉退

千字文試論

心動 都邑 盤礴 樓觀 画綵 墳典 亦聚 伊尹 阿衡
 丹青 雁門 洞庭 縣遊 杳冥 稼穡 孟軻 史魚 秉宣
 嘉猷 勉其 省躬 譏諷 近恥 兩疏 沈默 求古 逍遙
 渠荷 的歷 梧桐 陳根 委翳 落葉 遊鶻 寓目 攸畏
 屬耳 飡飯 老少 侍巾 帷房 員潔 昼眠 藍筍 悅予
 嫡後 再拜 懷特 誅斬 匪虧 禽獸 傍啓 碣石 枇杷
 捕獲 利俗 妍笑 旋璣 薪修 矩步 束帶 矜莊 徘徊
 瞻眺 孤陋

以上 101 語句 202 字

ハ) 共通しない文字

A 周興嗣千字文

洪 致 金 玉 光 皇 服 伐 湯 育 鳴 髮
 常 恭 莫 罔 尺 夙 淵 枝 涇 杜 漆 路
 策 溪 微 營 盟 恒 主 雞 赤 治 熟 中
 音 祇 組 逼 索 閑 慮 招 鰻 糟 絃 蒸
 倫 矢 吟 祐 劬 寡

以上54字

B 鍾繇千字文

儀 活 雉 田 虔 鉄 綸 初 濠 秋 磧 榮
 拓 鴻 祛 王 代 序 志 適 弦 失 祐 宦
 恬 徽 施 翰

以上28字

以上、数的なものを総括すると、次の通りとなる。

	4 言・2 言語句	共通する文字	共通しない文字
周興嗣千字文字 1,000 字	230字 (23%)	716字 (71.6%)	54字 (5.4%)
鍾 繇 千 字 文 974 字	230字 (23.6%)	716字 (73.5%)	28字 (2.87%)

4 言で共通するものが7 句しかないのは、予想以上に少ない。これは、無理にも異なるものにしなければという、必要以上に先行する千字文を意識するに、過剰であったとみる外はない。千字という限られた文字数の中で、どうにも動かす

千字文試論

このできないものがある、4言1句として使用されたとみる、これが2言になると、101語句202字と20.2%である。単語を組合せ容易に熟語をつくり出す漢語の特性からみると、たいした数ではない。また、1字をもって共通する文字が、70%強であるのにも驚く。次韻したのであれば、ほぼ100%に達せんとする数になってよいはずである。それでも5%を残したということは、周興嗣に多い点に注目しなければならない。もちろん鍾繇が総数において974字と少ないのは、文字を使いこなせなかったが故に1,000字にいたらなかった、ということになる。周興嗣が残しながら、自分なりに新たに補ったという製作方法は納得がいかない。文章技巧においては、中国文学史上類をみない時代の文学者である、彼のプライドが許さないはずである。これはどうしても宋代の人間が、周興嗣の千字文を素にして作り上げたものだとしか、判断のしようがなかろう。次に、双方に共通しない残留する文字をみると、今日でも基本となる文字が多い。特に千字文は皇子達用の教科書として作られたものであることを思うとき、「皇・致・恭・育・金・玉・光」などの文字を共通しえなかったのは、この書の生命を無にしたことになる。王道を説き、君子を言うに、内にありては親に孝、外にありては天子、先人に仁であり、真でありたいという、中国の基本思想・教養に欠けるは、周興嗣にあらずして鍾繇千字文の脚色家である。この点になると魏の大官鍾繇自身であれば、周興嗣以上に国をおもい、皇帝に忠であり、家門の確充と発展に言が及ぶはずである。文全体の共通性をみると、周興嗣千字文は全般にわたって、共通語句が分布している。これに対して、鍾繇千字文は前半部に集中して後半は共通語句108語句中30語句をみるだけである。これをいかに解するかとなると、周興嗣千字文を底本にして、適語を抜き、組み合わせていったときに、周興嗣文は全体に及んだのである。組み立てていった鍾繇文は前半作りえたが、字数が残りに少なくなると、2字もしくは4字をもって適句を作り難くなって、勢い、後半は1字ずつ拾い出して文を組立てる外なかった。そう考えてみる以外にないのである。また鍾繇文の「藍笋矩步、孤陋嘉猷」から「坦箱譏誡」までの11句のうち、共通せざる文字6字のみで44字中他は、ことごとく共通するという極端な例がみられ

千字文試論

る。比較的集中する傾向があるということは、採られたというよりは、採取して組立てていく側に生ずることであることを、念のために提言しておこう。千字文は重字することなく、1,000字が生命であるにもかかわらず、鍾繇千字文は重出する文字10文字、総数974字は何を物語るのであろうか、言うまでもなく、後世の情熱なき作者の贗物である。

作者であるという、鍾繇は字は元常、潁川郡長社県（河南省許昌県）の人。はじめ後漢王朝につかえたが、魏の太祖曹操のもとで魏王朝の建国に功劳があった。魏に仕えて宰相となり明帝のときの定陵侯に封ぜられ、太傅を授けられて、太和4年(230)81歳で卒した。魏の重臣としての彼の伝には、書を善くしたことについては記すところがない。これは、あまりにも大官であったゆえであって、あくまで士大夫としての教養であれば、ここにとりたてて書人なる鍾繇を記録することもなかったのであろう。とは言うものの、『三国史魏志』によると、胡昭は史書（隸書）をよくし、鍾繇・邯鄲淳・衛觐・韋誕とともに、ならびに名があり、尺牘の手蹟は、ときとして模範とされた⁽¹⁵⁾、とあるから生前より世に認められていたわけである。若くして抱犢山に入り、書を学ぶこと3年、ついに魏太祖邯鄲淳・韋誕などと用筆について議する程になった。韋誕に蔡邕の筆伝を問うたが、教授してもらえなかった。そこで鍾は胸を槌って血をはいて自殺をはかった。太祖は五霊丹を服させて救った。誕が死んでからその墓を暴いた鍾は、ついに蔡邕の書を手に入れた。その後、鍾の書はさらに妙筆をもったし、精思して書を学び、寝ては寝具に指で字を書いては孔をつくり、厠に入りては書のことを想うて終日出るのを忘れていた。万物を見る毎に、すべて書に象どった。『太平広記』巻第206に、

魏鍾繇字元常。少随劉勝入抱犢山。学書三年。遂与魏太祖，邯鄲淳，韋誕等議用筆。繇乃問蔡伯喈筆法於韋誕。誕惜不与。乃自槌胸嘔血。太祖以五霊丹救之得活。及誕死。繇令人盗掘其墓。遂得之。由是繇筆更妙。繇精思学書。臥画被穿過表。如厠終日忘歸。每見万類。皆書象之。繇善三色書。最妙者八分。

という。鍾繇が書学に命を賭けて精進したことを言うのであるが、その実際はいかばかりであったか、明らかでなく伝説として留める外にない。

鍾繇が存世した時代、後漢末から魏にかけては文学が盛んであった。今、『全漢三国晋南北朝詩』をみても、彼の作する詩文はなく、文学を善くした姿は浮彫りにされてこない。著述したものに晋衛恒の『四体書勢』の隸書勢を唐・徐堅『初学記』では、鍾のものとするが、『書断』では蔡邕作として定まらないのである⁽¹⁶⁾。また、筆髓論という書論があった⁽¹⁷⁾というが、これも伝わることなく、その存在したか否かすら判明しない。してみると彼の文は、書疏と法帖になっている、上書文が判明しているのみである。彼が千字文を編集したという論拠が、どうしても定まらず、鍾繇千字文は、彼の伝説の一端であるとしか断定のしようがないのである。

それでは、名を今日に残している書家鍾繇についてはとなると、これもまた、確かなものとしてなく不安なのである。鍾繇の書について論じたものを、時代を追って観ると、西晋のとき衛恒が著した『四体書勢』をまず挙げなければならない。劉徳昇に学び、行書の法を確立して、いま広く世間で行われていることを述べる。

魏初有鍾胡二家為行書法，俱学之於劉徳升，而鍾氏小異，然亦各有巧，今大行於世云。

西晋時代は、彼の行書が評価され、流行していたことが判る。東晋になると、王羲之の『自論書⁽¹⁸⁾』に言うに、自分の書は鍾繇・張芝に対抗できるか、それ以上かもしれない。久しく諸々の先人の書をもても、鍾繇と張芝は特にすぐれている、と鍾繇の書を高く認識している。宋の羊欣の『古来能書人名』には⁽¹⁹⁾、鍾繇が得意とするものに、三書体あるという。その1つは、銘石の書という碑銘に用いる隸書体で、これが最もすぐれたものである。その2つは、章程書という秘書監が伝えた文字、公式文書に用いた書体であり、初心者に教えたものであった。その3つは、手紙に用いる行書体の行狎書であった⁽²⁰⁾。先にあげた『四体書勢』が言うところは、この行狎書を言っているのである。同じく宋の虞和が著わした

千字文試論

『論書表』に、鍾繇・張芝は、王羲之・王献之の二王より古びたとしている⁽²¹⁾。この上表文は宋の明帝の泰始6年(470)に成立したものであるから、王羲之が没して5年、王献之存命時において、もはや鍾繇・張芝の時代から、二王の時代になっていることがわかる。世間では書跡が金になることから、偽作するものが多かったことにも言及及び、今宮中の秘蔵として鍾繇の紙書は697字で、多くは簡単な法帖であるという。時代が下って齊の王僧虔の『論書』には、

亡高祖丞相導，亦甚有楷法。以師鍾衛，好愛無厭。喪乱狼狽，猶以鍾繇尚書宣示帖衣帶。過江後，在右軍處。右軍借王敬仁。敬仁死，其母見脩平生所愛，遂以入棺。

丞相王導は書を善くし、鍾繇・衛瓘を師として、書を愛して厭くことがなかった。喪乱のときも、鍾繇の宣示表を衣帯におさめていたという。鍾繇の書の中で、今日に残る法帖名が、はじめて明らかにされている。この宣示表は長江を渡ってから後は右軍羲之のところにあった。のち、右軍から王敬仁が貸りて、この帖を大切に惜しんでいたもので、敬仁が亡くなると、母は、この帖を棺に入れてしまった。世が二王の書に志向している時代に、鍾繇をよしとする、書愛好者達がいいた。その1人梁武帝は『観鍾繇書法十二意』に

字外之奇，文所不書。世之学者，宗二王，元常逸迹，曾不睥睨。羲之有過之論。後世遂爾，元常謂之古肥，子敬謂之今瘦，今古既殊，肥瘦頗皮。

という。すなわち、世において書を学ぶものは、二王を尊び、鍾繇の筆跡はよく観ていないのに、王羲之がよりすぐれているという意見がある。と二王にのみ終始する世情に批判を向けて、しかし、よく洞察してみると、人々が言う見方と異なっていると看する。張芝と鍾繇とは巧妙なる筆勢と精密なる形体ももって、神品さを漂わせている。これらの真蹟は少なく、ただこのように推察するのである。

如自省覽，有異衆說。張芝鍾繇，巧趣精細，殆同機神。肥瘦古今，豈易致意。真跡雖少，可得而推。逸少至學鍾書，勢巧形密，及其獨運，意疎字緩。譬猶楚音羽夏，不能無楚。過言不悞，未為篤論。又子敬之不追逸少，猶逸少之不追元常。學子敬者，如画虎也。學元常者，如画龍也。

千字文試論

梁武帝はこよなく、鍾繇書を愛したとあっていい。もちろん、王羲之父子の書を避けることではなかったが、書の革命者羲之の書には、あまりにも新しく王道にあるものとして追際できなかったのである。それよりは、長く歴史の風雪に耐えてきた、鍾繇書をよしとし、羲之書はもうしばらくの時の流れを要すると見たのであろう。鍾繇書を渴望する、もう1人の学書者がいた。山中の宰相と言われ、梁武帝の政治顧問の役にあった陶弘景である。彼は帝の論に接して、もし手許に鍾繇書があるならば、摹写されたものをご殊恩願いたいと、切望している。それに対して、武帝は、1巻手元にあって大切にしてきたが、摹書である。しかし、よく鍾法を窺うことができ、羲之が鍾を学んだのは、さもありなんと納得できるとし、近頃20首ほど得たものを、来月遺送する。と答えている。これは『法書要録』『陶隱居与梁武帝論書啓』⁽²²⁾にみえる。鍾繇が率した太和4年(230)から、梁武帝の時世まで300年に及ぶうちに、天子の手元においてすら、このように鍾繇書は、見がたきものであった。武帝は鍾繇書に熱心で、王献之書を学んでいた蕭子雲に、鍾法を勧めた。子雲はそれによってか後に一家を成し、唐代にまで尊ばれた。梁の庾肩吾は、『書品』を著わし、張芝・鍾繇・王羲之の3人を、上之上という最高の評価をしているし、同じく梁の袁昂は『古今書評』で、張芝は驚奇、鍾繇は特絶、王羲之は鼎能、献之は世に冠たり。この四賢は同類で、その偉大さは永遠であるという。唐の時代になると、李嗣真が、『書後品』に最上の逸品人として、李斯・張芝・鍾繇・王羲之・王献之をあげる。しかし唐・張懷瓘の『書議』になると、真書では王羲之が第1、鍾繇第2、行書では王羲之第1、鍾繇第3、である。また張懷瓘は『書断』で、鍾繇の隸書と行書は神品、八分と草書は妙品としている。王羲之は、隸書・行書・草書・章書・飛白はいずれも神品、八分は妙品に入れている。こうしてみると、唐代に入って、鍾繇書は夕日の如く、沈んでいく運命にあったのに対して、王羲之の書は、模範なるものの地位を確立したのであった。唐代の人々は、洗練優雅な江南の文化をめざした。その代表的な人物が、太宗である。帝は「蘭亭序」を智永の弟子弁才のもとから奪い、墓中に埋めてしまったという⁽²³⁾、話題の主人公である。王羲之の正統を継いだ、

虞世南・欧陽詢を重用したことからみても、書をよくするというだけではない。もっと心に宿る、南朝への憧憬が太宗にあったとみてよからう。時を経て宋代になると、貴族社会は、ただ前代の唐それのみを継承することに専念するだけであったから、ここに、復古的色彩をもつことになる。科举をさらに重視することによって、理知的な物の見方が強くなったのである。かような要因から、王羲之にとどまらず、羲之の源泉を辿るときに、鍾繇を大きくとり上げることになったのである。

南唐の李後主が昇元2年(938)に、墨蹟を建業で摹勒上石して「昇元帖」と称したのが、法帖の最初であるが、五代に入って印刷術の発明と発展によって、法帖が盛んに印行されることになり、その口火を切ったのが、淳化閣帖であった。これより各集帖に、鍾繇の書が刻されて、明代になると、今日知ることのできる限りの鍾繇が形づくられるのである。そこで、鍾繇の諸帖をあげてみる。

1) 宣示表

始めて淳化閣帖に刻され、その後、大観帖・東書堂帖・天烟堂帖等に重刻された。前述の王僧虔の『論書』に、「丞相導も鍾・衛を師とし、好愛厭くなし。喪乱狼狽のときも猶鍾繇の宣示帖を以って衣帯せり。江を過ぎて後は、右軍の処にあり。右軍王敬仁に借し、敬仁死するや、その母その平生愛するところなるを見て、遂に以って棺に入れき。」という。真蹟はなく、今伝わるものは王羲之の臨したものであるとされている。

2) 還示帖

これも淳化閣帖にあり、宣示表の後に、収められている。大観帖を始め、諸帖に刻されている。

3) 賀捷表

これは明代に刻されたもので、鬱岡齋帖に入っている。欧陽修の『集古録跋尾』では、この表疑って真にあらずと為すべし、董道も『広川書跋』で偽物と判定している。これに対して黄長睿は、『東觀余論』で鍾繇の手にしたものがあったとする⁽²⁴⁾。

4) 薦季直表

この表は元時に、はじめて世に現われたものである。元代は陸行直の家蔵であったのが、明に至って沈啓南の手中にあり、次いで華東沙に伝わり、真賞齋帖に刻され、鬱岡齋帖にも刻されて、清朝には三希堂帖にもおさめられた。この帖は宣示表とともに、鍾繇の代表作とされるだけに、真贋両説が特にやかましいものである。孫退谷『庚子銷夏記』に言う、「これより先未だ古刻を見ず。ただ華氏の真賞齋帖に於て之を見たり、謂う真蹟は沈啓の家にあり、華氏之を得て上石し、一時盛伝して以って奇跡と為すと。然るか否か。世豈晋跡の千二百年後に有するものあらんや。その書に隸体ありと雖も、但、娟娟にして俗学の漸を開くのみ。力命、墓田諸刻の端勁にして典型を具せるに視ぶれば相去ること径庭あり。その宋元人の偽作たるや疑いなき也。」また、王蕪林が『虚舟題跋』で、楊守敬は『平帖記⁽²⁵⁾』でやはり偽蹟として論じている。他に、淳化閣帖におさまるものに、白騎帖・雪寒帖・力命表・墓田丙舍帖があるも、贋作の評定を免れることはできない。

たしかに、鍾繇は能書家であった。『四体書勢』に彼の名をあげていることから、そのことは充分理解できるのである。その書は後漢末から北魏の大官武人としての、気魄に満ちた人柄が表出する書であった。それが黄河流域から長江流域に数少ない書が南下して、西晋・東晋にいたり、王羲之を育む一端を担うことになった。王羲之の手を経た鍾繇書は、北魏風から、南朝的に優美さをもって、宋・齊・梁の貴族文化人達の愛賞をうけることになる。梁武帝と陶弘景の啓に言うように、真蹟は皆無といっているほどであった。それが、宋代に下って忽然と現われてくることは、いかに思慮すれども、まさに孫退谷の論ずる如く、真蹟と断ずるの方かないのである。『宣和書譜』には御蔵一書とあるのみであり、俗間で偽作されたものが、宋・明の集帖に収まったと見る他はない。鍾繇は特に、宋代において創られた人であり、その書もまたしかりであった。故に鍾繇千字文なるものも、章程書を得意としたという、古書に基づく英雄、伝説的脚本の一部にあると、見るものの、その原因は『宣和書譜』の王羲之の条に、書魏鍾繇千字文

という記載によるのであって、楊守敬が『学書邇言⁽²⁶⁾』で指摘するところである。今日われわれの考える鍾繇は唐・宋特に宋以後の法帖によってつくりあげられた鍾繇であって、それなりに1つの書芸術の佳境にまで到達している。鍾繇を云云する時、このような見解に落着くのである。

3

千字文の原本を成した蕭子範の弟蕭子雲は、字を景喬といい、子恪の第9弟である。彼は沈着冷静な性格であり、人びととの交際もあまりなく、いつも1人で悠然とすることが多かった。ただ、自己主張が強く、無礼な行為が重なるので兄弟とは仲が悪かった。有能な兄弟が肩をならべて、時勢に一門を光輝なさしめんとするに、子雲は孤立して独立独歩であった。もちろんそれなりに彼は文才のみならず、書芸においても、梁代を代表する1人であったし、また学芸をよくし26歳で『晋史』110巻を著わし、他に『東宮新記』20巻を物にしている。

『晋史』の、王羲之・王献之二王の列伝を著述しながら、草隸のことについて、言意を尽せず、ついにその項はなきずに、飛白について論じただけであった。それから10年の歳月が流れ、梁武帝の『観鍾繇書法十二意』から用筆と字体の観察について感得するところがあった。また、王羲之が鍾繇に及ばないこと、王献之が王羲之に及ばないことのようにあることに気づき、それまで王献之を学んでいたが、これをやめ、自分なりに研思して隸書の方式を悟り、専ら鍾繇を範とした。梁武帝は彼の子雲の書を評するに、「筆力が力強く、心の思うところよくその手が応じ、巧みなること杜度に過ぎ、美麗なること崔寔にすぐる、まさに、鍾繇と肩を並べて先を争うが如き、できばえである。」と絶讃する。以上は、『梁書』・『南史』の語るところである⁽²⁷⁾。

梁武帝の絶讃が影響してか、蕭子雲の書は梁代においては高い評価を得ていた。しかし、唐代に入ると低下してくるのは、鍾繇の書と同じ運命を歩んでいることが明らかである。このことは、子雲自ら言うように、また梁武帝にあるように、彼の書と、鍾繇と比していかに違わぬものであったかを、裏書きするものとして

千字文試論

解することができるのである。そこで子雲書がいかにもられたか、その変遷を掻き摘まんでみると、梁・庾元威『論書』に「咸言，祖述王蕭。」とあるところを見ると、王羲之ほどに子雲は、世人の手本とするところであったことが判る。梁・袁昂『古今書評』には、「蕭子雲書，如上林春花。遠近瞻望，無處不發。」上林というから、天子の庭園に咲きそろう春花は、遠近よりそれぞれ眺めてみると、どこもかしこも咲きそろう如きであると、華やかな美満美観の評を呈している。唐代に下ると、先ず、太宗の批評⁽²⁸⁾をあげなければならない。太宗の言葉は、その後の蕭子雲評価に大きく影響を与えることとなった。次いで李嗣真・『書後品』に言うに、蕭子雲を陶弘景と同じ中中品12人の1人に入れて、隸書は技巧がなされていない難点があり、高い絶妙さには及ばない。「子雲正隸・功夫恨少。不至高絶也。」また、同書に顔之推の言葉として、阮研、蕭子雲、陶弘景は、それぞれ右軍王羲之の一体を得て当時絶冠と称したと云う。徐浩『論書』に、近古では、蕭子雲・智永・欧陽詢・虞世南が大いに筆勢を伝えた旨を記す⁽²⁹⁾。初唐を代表する欧陽詢と虞世南は際代において高名をなし、唐に入ったときは、年50を過ぎていた。徐浩は意識的であったか、または世評がそうであったのか、図らずも、「伝授筆法人名」の言うところの関係を成している4名である。それによると、蕭子雲は智永に伝え、智永は虞世南に伝え、虞世南は欧陽詢に伝えた、というところに合致する。李懷瓘『書断』では子雲の隸書と飛白を妙品とし、小篆・行書・草書・章書を能品とする。また、蕭子雲の書の模倣をこころみれば、児童であっても熱心になって数日習うと、その児童の書が蕭子雲を学んだことがわかる。これが鍾繇を学ぶとなると、穴からのぞきこみ、垣根全体を見ることができないように門をうかがうものは少ないと、子雲は気力なく、俗的であるのに対して、鍾繇の深遠偉大なることを言う⁽³⁰⁾。宋代に入ると、『宣和書譜』では、子雲には王羲之に比べひ弱さがあり、隸書は鍾繇を模範としたが、気品までは得られなかったと言う。こうしてみると、梁代においては代表的な蕭子雲であったが、唐・宋となると、鍾繇・王羲之の垂流として影を薄くしていったのであった。『書断』はこの点を適切に言及している。

千字文試論

其真草，少師子敬，晚学元常。及其暮年，筋骨亦備，名蓋当世，举朝效之。楷書・草書は若い時には子敬（王献之）を習い，後年元常（鍾繇）を学んで筋骨を備え，当時名声をなして，朝廷の官吏はみな子雲の書を習ったのであった。それもこれも，梁武帝の言動によるものである。

梁武帝，擢与二王並迹，則若牝雞仰於鸞鳳子貢賢於仲尼。雖絶唱於彼朝，未日陽春白雪。

梁武帝が二王の筆蹟と同列に高く認承したのは牝雞が鳳凰よりも仰かれ，子貢が仲尼孔子よりも賢っているというのは適当でない。武帝の朝ではこの上もないほどの評価であったが，まだ陽春の白雪の如く，手のとどくものでそれほど高尚なものではない。王羲之を出現させた鍾繇は，ある意味では中国書道史の故里であり，母であるといえよう。その模倣は南朝という豊沢な土地に安閑として，己のみしか念頭になく，遊びの世界しか持ち得ぬ貴族社会からは，鍾繇を超越する清厳さはなく，当然，南朝に湯仰する初唐に通用するだけであった。

蕭子雲の書そのものは，今日，鍾繇へ導入する意義はあるとしても，決して，書の歴史に確たる光輝な地位を得るものではない。が，今まで見た如く，梁武帝の寵愛のもとに彼在世中，世を風靡している。このあたりの事情については，『南史』の列伝第32にいう，

出為東陽太守。百濟国使人至建業求書。逢子雲為郡。維舟將發。使人於渚次候之。望船三十許步。行拝行前。子雲遣問之。答曰。侍中尺牘之美。遠流海外。今日所求。唯在名迹。子雲及為停船三日。書三十紙与之。獲金貨數百萬。性吝。自外答餉。不書好紙。好事者重加賂遺。以要其答。

東陽守として，任地先に船で赴かんとする時，百濟の使者に呼び止められて，書を求むるに応じ3日停泊し30紙を書いて金貨數100萬を得たという。この話しは『宣和書譜』にもあり，「初子雲，以書得名」子雲が書で名声を得た頃のこと，としている。百濟から彼の書を求めに，わざわざ都建業に使者が到来し，その使者が言うに，「侍中尺牘之美，遠流海外」，倚中子雲の尺牘，即ち書簡の美しさは，遠く海外にまでその名は知れわたっているという。若い時に王献之を習い，その

千字文試論

後鍾繇を学んだ彼の書は、鍾繇と二王を兼ね備えた書であったことと、世人に受け入れやすい平易な書であったと見る事が出来る。それは唐代に評されたように、子供でも習書することが可能な通俗的な書風であったことを改めて確認するときに、千字文の書をここに想察するのである。

蕭子雲が千字文を書いたという記述は、子雲自身の言葉として、『法書要録』巻1 梁蕭子雲啓に見える。

臣子雲奉勅使臣。写千字文。今已上呈。

兄子範が作文したものを周興嗣が次韻して、王羲之の書を用いたものの外に梁武帝は子雲に命じて、書写せしめたことになる。子雲にすれば、今日遠く海外までも自分の書が喧伝され、求められているのも、発端は武帝の書論に啓発されてのことであったことは重重自覚している。それだけに全てにおいて、帝を信服して師と仰ぐほどであったし、ひとり書のみならず、他の事柄も勅に応えることに努めたことは、沈約が撰した文なども、不適な点をあげて、彼が作成している⁽³¹⁾などにも心配りが表われている。また宮廷の宴楽である相和歌の演奏目録なども、編集している。武帝は己の身を持って実践した者として、子雲を異常なまでに評価した。伝えられて、百濟人が子雲書に関心をよせたことではなく、朝貢した百濟びとに対して、書ならば子雲なる旨をもって、授与されての後に上記のような百濟びとの要求が、なされたのであろう。造寺されては子雲に大字を書かせる⁽³²⁾など、帝は機会ある毎に彼を使い、世間に知らしめることをした。雄健な鍾繇と時代に順応した王羲之の二要素を持つ子雲は、手本の文字として最適であった。帝の狙いも、まさにここにあって、自信と期待に胸おどらせるものがあつたであろう。

文人梁武帝の発議によって、新しい初学書なる千字文を作したのは、蕭子範であった。文才周興嗣が次韻して、王羲之書を用いたとしても、府中に流伝するものは蕭子雲が書いたものであり、これは随に入って僧智永の千字文を生む源となるものである。智永はよく言われる王羲之7世の孫で、二王の書を継承したとい

千字文試論

うよりは、蕭子雲の弟子であったと、見るべきであろう⁽³³⁾。周興嗣の名文と子雲の書をもって、その後、識子書・書素材書の2面をもった千字文は今日に至るのである。

なお、この小稿が成るにあたり、中里重吉教授から貴重な文献を拝借し、また御指導いただいた。ここに深く感謝申し上げる。

注

- (1) 『南史』列伝第62に、「銅表銘。柵塘碣。檄魏文。次韻王羲之書千字。並使興嗣為文。每奏。帝稱善賜金帛。」
- (2) 『南史』列伝第32に、「王愛文學士。子範偏被恩遇。常日。此宗室奇才也。使製千字文。其辭甚美。王命記室蔡遜注積之。自是府中文筆。皆使具草。」
- (3) 『梁書』列伝第29蕭子恪に、「子恪兄弟16人、並仕梁。有文學者、子恪、子質、子顯、子雲、子暉5人。」という。子質とあるのは、子範の誤りで、中華書局本の注に、「按本卷有子範無子質、子質當是子範之譌。」とあるによる。
- (4) 『梁書』列伝第29に、「我初平建康城、朝廷内外皆勸我云、時代革異、物心須一、行処分。我干時依此而行、誰謂不可、我政言江左以來、代謝必相誅戮、此是傷於和氣、所以國稱例不靈長。」森三樹三郎『梁の武帝』（サーラ叢書5 平楽寺書店）60～61頁による。
- (5) 平凡社『書道全集5』小川環樹「千字文について」において、“実は周興嗣あるいは王羲之の以前に千字文という1篇が存在したとの想像は、多分「周興嗣次韻」の題の誤解から生じたものであろう。ふつう次韻といえは或る詩人の原作の詩に対し、別の詩人がその押韻の字だけをそのまま使い、全く異なった1篇の詩を制作する意味に用いるからである。だから、すでに次韻という以上は、それに対する原作がなければならぬという推論がうまれる。ところが、右のように他人の詩の押韻の字だけを残して新しい詩を作る「次韻」のやり方は、唐代（8世紀末から9世紀中葉）の元稹、白居易に始まり、それ以後さかんになった事であった。またこれを次韻の名でよんだのも、この2人に始まる。8世紀以前には、ほとんどその例がない。まして6世紀には元・白のような意味での次韻はありえない。「周興嗣次韻」とは、「文字を韻文になるように排列した」の意味に解釈されるべきである”。
- (6) 『梁書』列伝第49に、「是時、高祖以三橋旧宅為光宅寺、敕興嗣与陸倕各製寺碑、及成俱奏、高祖用興所製者。」と周興嗣伝にはあるが、陸倕伝には見当たらない。

千字文試論

- (7) 先賢所評，子敬之比逸少，猶士季比元常言之遠矣。故二王之跡歷代寶。之梁大同中，武帝勅周興嗣撰千字文，使殷銑石模次羲之之迹。以賜八王右軍之書，咸歸梁室屬。
- (8) 『梁書』本紀第3武帝下に，「加以文思欽明，能事畢究，少而篤學，洞達儒玄。雖萬機多務，猶卷下輟手，燃燭側光，常至戊夜。造制旨孝經義，周易講疏，及64卦，2繫，文言，序卦等義，樂社義，毛詩答問，春秋答問，尚書大義，中庸講疏，孔子正言，老子講疏，凡200余卷，並正先儒之迷，開古聖之旨。」
- (9) 『梁書』列傳第7沈約に「又撰四聲譜，以為在昔詞人，累千載而不寤，而獨得胸衿，窮其妙旨，自謂入神之作，高祖雅不好焉。帝問周捨曰「何謂四聲？」捨曰「天子聖哲」是也，然帝竟不遵用。」
- (10) 字外之奇，文所不書。世之學者，宗二王，元常逸迹，曾不睥睨。羲之有過之論。後生遂爾雷同，元常謂之古肥，子敬謂之今瘦，今古既殊，肥瘦頗及。如自省覽，有異衆說。張芝鍾繇，巧趣精細，殆同機神。肥瘦古今，豈易致意。真跡雖少，可得而推。逸少至學鍾書，勢巧形密，及其獨運，意疎字緩。譬猶楚音習夏，不能無楚。過言不悞，未為篤論。又子敬之不迫逸少，猶逸少之不迫元常。學子敬者，如画虎也。學元常者，如画龍也。余雖不習，偶見其理。不習而言，必慕之歟。聊復自記以補其闕。非欲明解，強以示物也。儻有均思，思盈半矣。
- (11) 『全梁詩』によると，次の通りである。
- 吳均の贈りし詩は，
- ◎任昉に「贈任黃門2首」
- ◎蕭子顯に「和蕭洗馬子顯古意6首」
- ◎蕭子雲に「酬蕭新浦王洗馬2首」・「答蕭新浦」がある。
- ◎周興嗣に「贈周散騎興嗣2首」・「贈周興嗣4首」がある。
- ◎殷鈞に「以服散鎗贈殷鈞」
- 蕭子雲が贈った詩は，
- ◎吳均に「贈吳均」がある。
- 周興嗣が贈ったものに，
- ◎吳均に「答吳均3首」がある。
- (12) 殷鈞は『梁書』列傳第21殷鈞によると，「善隸書，為當時楷法，南鄉范雲，樂安任昉並稱賞之。高祖與鄒少旧故，以女妻鈞，即永興公主也。」というように，書をよくして，時の実力者范雲，任昉に賞讃を得るほどであったこと。また武帝の婿であり，国子祭酒を任ずるほどに，時勢をとらえた人であった。また，「鈞在職，啓校定祕閣四部書，更為目錄。又受詔料檢西省法書古迹，別為目錄。」と祕閣四部を校定して目錄を作り，詔を受けて古書跡の調査にあたり，目錄を作成している。府

千字文試論

内に蔵する筆跡は、梁武帝が情熱をもやして蒐集したものだけに、血縁関係にある殷鈞をしてその職に当らせたともいたい。

書人としての殷鈞はどうであったかという点、庾肩吾の『書品』には「殷鈞頗耽著愛好，終得肩隨」として、中之上においている。また、庾元威『論書』に言うに、冒頭の部分で「所学生書，宜以殷鈞范懷約為主。方正循紀，修短合度。」と。すなわち、正書を学ぶには、殷鈞と范懷約の書法を主とすべきであるという。書のうちでも、特に正書の筆法が正確であるということは、相当数の名品筆跡を覩ていたことになる。鍾繇にしても、王羲之父子の筆跡にしても、梁武帝の収集にあるものを、管理整理する任にあったことによろう。さらに袁昂の『古今書評』には、「殷鈞書，如高麗使人，抗浪甚有意氣，滋韻終乏精味。」という。古典に忠実であればあるほど倣書になり、生彩に乏しい書になったものと思われる。

唐書の言う殷鉄石なる人物は、『梁書』『南史』等に伝記がなく、他の記事中にすら見当たらない。周興嗣とともに作業をするほどの人でありながら、その名前が正史に記載されなかったということは、不可解である。

王羲之書の扱いを許され、周興嗣と共同作業を命ぜられる者とすれば、実は、殷鈞この人であったと断定したい。

- (13) 『法帖通解』・漢章帝書に言うに、「衛巨山云。漢興而有草書，不知作者姓名。至章帝時，齊相杜度号善作篇。是章帝時已有草書矣。然千字文者，乃梁武帝得王羲之所書千字，使周興嗣以韻次之。時南平王偉，令蕭子範亦製此文。蔡邕浪積辰宿一帖，興嗣文也。豈得為漢章帝之書耶。」
- (14) 『宋史』卷266李至列伝に「草書千文為，賜勒石日，千文乃梁武，得破碑鍾繇書。命周興嗣次韻而成。理無足取。」これを受けて、宋・王應麟撰『玉海』卷45に「宋朝太宗謂近臣曰，千文蓋梁得鍾繇破碑千余字，周興次韻而成。詞理亡可取。」と記している。宋の太宗が言われるところは、鍾繇書破碑をもとにして、周興嗣が次韻したというのであって、ここには王羲之書は取り上げられていない。

わが国の近年に限ってみても、鍾繇千字文説は絶えることがない。その主要なものをあげてみると、木村正辞「百済貢献の千字文」（『東京学士会院雑誌』第16編之7）で、上書の『宋史』を典拠として、鬱岡齋帖所収で明らかであるとする。山岸徳平「日本漢文学史総説」（山岸徳平編『日本漢文学論考』岩波書店昭和49年）では、従来の諸説をあげながら、『魏志』鍾繇伝に千字文の述作記事の見えないことを疑問としながらも、宋代書の記述に従っている。川瀬一馬『日本文化史』（講談社学術文庫昭和53年）第4講聖徳太子治世の意味一において、千字文はその書物の性質上、時世とともに千字の組合せ内容が編成替えになるとして、鍾繇の千字文の存在を否定していない。

千字文試論

- (15) 中田勇次郎「鍾繇とその書」(『中国書論集』二玄社1977年) 参照『魏志』卷11管寧伝に「昭善史書，与鍾繇・邯鄲淳・衛顗草誕並有名。尺牘之蹟，動見模楷焉。」
- (16) 『四体書勢』に「作隸勢日，鳥跡之变，乃惟佐隸。獨彼繁文，崇此簡易。厩用既弘，体象有度。煥若星陳，鬱若雲布。」と記す。これを『初学記』卷21 文字3で，星離・雲布の項には「鍾氏隸書勢日，煥若星陳，鬱若雲布。」，視龜・変鳥の項に「鍾氏隸書勢日，鳥勢之变，乃惟左隸。」，刪旧・獨煩の項には「鍾氏隸書勢日，獨彼煩文，崇此簡易。」と作る。これに対して『書断』では，「蔡邕隸書勢日，鳥跡之变，乃惟佐隸。獨彼繁文，崇茲簡易。修短相副，異体同勢。煥若星陳，鬱若雲布。」と言う。
- (17) 唐・李嗣真『九品書人論』に「魏鍾繇正書散隸兼，撰筆髓論。」とある。
- (18) 「吾書比之鍾張，当抗行，或謂過之。」と言い，また「吾尽心精作，亦久尋諸旧書，惟鍾張故為絶倫。其余為是小佳，不足在意。」とも言って，鍾繇・張芝を別格としている。
- (19) 「鍾書有三体。一日銘石之書，最妙者也。二日章程書，伝祕書教小学者也。三日行狎書，相聞者也。三法皆世人所善。」
- (20) 中田勇次郎「鍾繇とその書」(『中国書論集』二玄社1977年) 参照。
- (21) 「夫古質而今妍，数之常也。愛妍而薄質，人之情也。鍾張方之二王，可謂古矣。豈得無妍質之殊。」
- (22) 『梁武帝又答書』に「鍾書乃有一卷。伝以為真。意謂。悉是摹学。多不足論。有兩三行許似摹微得鍾体。逸少学鍾的可知。近有二十許首。此外字細画短。多是鍾法。今始欲令人帖装。未便得付。来月有竟者。当遣送也。」
- (23) 唐・何延之『蘭亭記』・『蘭亭始末記』にみえるものである。ほかに太宗が手にしたことについて，唐・劉鍊『隋唐嘉話』・『太平広記』卷第208「購蘭亭序」にも記す。

太宗の王羲之への傾倒ぶりは、『晋書』卷80王羲之の伝を自ら撰していることからみても，並み並みならぬものであったことが充分に窺える。

- (24) 『集古録跋尾』によると，この賀捷表，曹仁が関羽を破った時に太祖曹操にたてまつった上表文であるからして，『魏志』の記事に依れば，12月か明年正月でなければならぬ。ところが表によれば10月に捷を賀したのは何故かとして真ならざるものとする。『広川書跋』では，古来鍾繇の書は字細に画短いと伝えられているにもかかわらず，その態が異なり，勁密さもない書は，鍾の勢巧形密に遠く偽書であるとする。ところが『東觀余論』は，12月に曹公が関羽を殺したのを賀したのではなく，撃破した10月に賀したものであるから，時期には問題ないとして欧陽修に反駁している。

千字文試論

- (25) 『虚舟題跋』では、「史伝によれば、鍾繇が東武亭侯に封ぜられたのが、献帝の初平3年であるにもかかわらず、この上表文は黄初2年となっている。黄初2年といえ、鍾繇は崇亭卿侯であったはずである。よって、偽蹟とするほかはない。」とする。『平帖記』は、「この帖は唐・宋以来、いまだその伝本を聞いたことがない。元の時、はじめて陸行直が手にしてから、世に知られることとなった。書は晋代以降のものは伝わっているが、魏の曹操の時代のものは、1字といえども存しないと、すでに貞観の時から言われている。いわんや、この薦季直表を鍾繇の書の1つに数えることはできない。」とする。
- (26) 『学書邇言』行草帖において、「鬱岡齋刻之。三希堂亦刻之。元常安得有千字文伝世。或以爲右軍所臨。右軍亦安得有千字文。此帖墨迹。余於蘇州顧子山家見之。紙墨頗古。大抵唐宋人所爲。」
- (27) 『梁書』列伝第29蕭子恪・子雲伝に言うに「子雲善草隸書、爲世楷法、自云善効鍾元常、王逸少而微変字体。答敕云、臣昔不能拔賞、隨世所貴、規摹子敬、多歷年所。年二十六、著晋史、至二王列伝、欲作論語草隸法、言不尽意、遂不能成、略指論飛白一勢而已。十許年来、始見敕旨論書一卷、商略筆勢、洞澈字体、又以逸少之不及元常、猶子敬之不及逸少。自此研思、方悟隸式、始變子敬、全範元常。逮爾以来、自覺功進。其書迹雅爲高祖所重、嘗論子雲書曰、筆力勁駿、心手相応、巧踰杜度、美過崔寔、当与元常並驅爭先。其見賞如此。」『南史』列伝第32齊高帝諸子・子雲伝も同様である。
- (28) 太宗は『晋書』130巻を編纂して、自ら列伝第50王羲之の伝を撰し、鍾繇・王献之・蕭子雲それぞれについて評して言う。鍾繇について、「逮乎鍾王以降、略可言焉。鍾雖擅美一時、亦爲迥絶、論其尽善、或有所疑。至於布織濃、分疎密、霞舒雲卷、無所間然。但其体則古而不今、字則長而遼制、語其大量以此爲瑕。」と述べ、王献之を評した後で蕭子雲の名をあげる。評するに、「子雲近世、擅名江表。然僅得成書、無丈夫之氣。行行若縈春蚓、字字如縮秋蛇。卧王蒙於紙中、坐徐偃於筆下。雖秃千兔之翰、聚無一毫之筋、窮万穀之皮、斂無半分之骨。以茲播美、非其濫名邪。」という。
- (29) 『論書』の冒頭において、「近古蕭永歐虞、頗伝筆勢、」と。
- (30) 『書断』評曰、「仮如効蕭子書、雖則童孺但至効數日、見者無不云学蕭書。欲窮窺鍾公、其牆廂、罕得其門者。」
- (31) 『梁書』『南史』の列伝に言う。『南史』の記述が簡便であるので、ここに引く。
「梁初、郊廟未革牲牲、樂辭皆沈約撰、至是承用。子雲啓宜改之、敕答曰、此是主者守株、宜急改也。仍使子雲撰定。敕曰、郊廟歌辭、應須典詁大語、不得雜用子史文章淺言而沈約所撰、亦多舛謬。子雲作成、敕並施用。」

千字文試論

- (32) 『太平広記』巻第207に、「武帝造寺。令蕭子雲飛白大書蕭字。至今蕭字存焉。李約竭産。自江南買帰東洛。建一小亭以翫。号日蕭斎。」(『出国外補』)
- (33) 臺静農・大野修作訳「智永の書学と後世への影響(1)」(『書論』第5号書論研究会1974年)128頁参照。